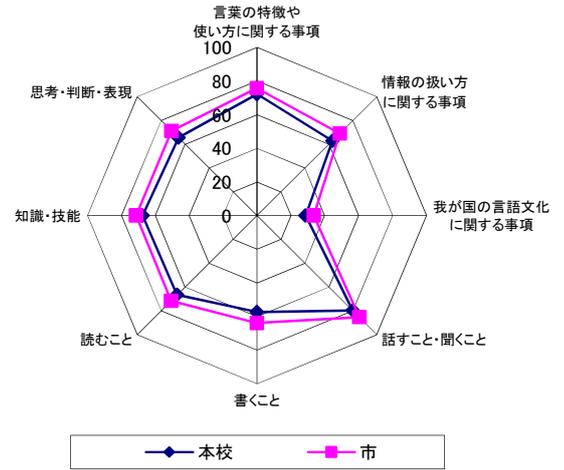


宇都宮市立横川西小学校 第6学年【国語】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	言葉の特徴や使い方に関する事項	72.3	75.8	77.5
	情報の扱い方に関する事項	63.0	69.1	67.0
	我が国の言語文化に関する事項	28.8	33.5	37.2
	話すこと・聞くこと	79.9	85.5	86.5
	書くこと	57.3	63.9	65.8
	読むこと	66.7	71.6	69.5
観点別	知識・技能	67.5	71.3	72.9
	思考・判断・表現	65.6	71.3	71.4

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

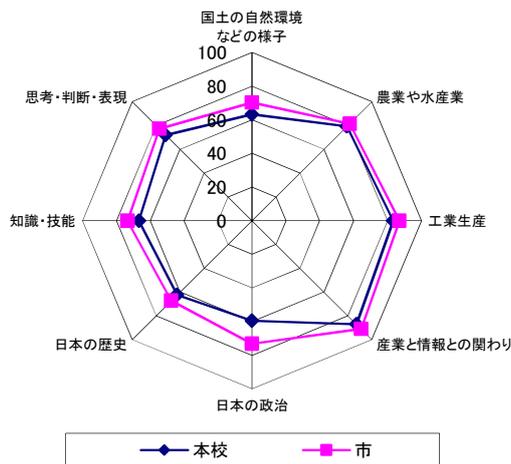
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や使い方に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を3.5ポイント下回った。 ○漢字の読みにおいては、市の正答率とほぼ同程度が高い状況である。 ●漢字の書きにおいては、市の正答率を下回っている問題もあった。 ●文と文の接続の関係についての問題では、市の正答率を11.7ポイント下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5、6年生で習った漢字について、繰り返し漢字練習をさせたり、Aドリルを活用させたりして、基本的な漢字を定着させる。 ・接続詞の種類やそれぞれの効果について、実生活の中での会話を例にするなど、状況が分かるような配慮を行うことで、理解を高めるようにする。
情報の扱い方に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を6.1ポイント下回った。 ○無回答者はいなかった。 ●文の中で結果を表しているものを選択する問いでは、文頭に結果が書かれている文を見分けることに課題があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文の中から原因と結果を判断したり、身の回りの出来事について原因と結果が分かるように文章を書いたりする学習を、授業の中で行う。
我が国の言語文化に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を4.7ポイント下回った。 ●和語、漢語、外来語についての理解に大きな課題があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の成り立ちや由来について授業の中で話題にしたり、調べる機会をつくったりするなど、和語、漢語、外来語に触れる機会を増やす。
話すこと・聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を5.6ポイント下回った。 ○話の内容をとらえる問題では、市の正答率を上回った。 ●自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉える問題では、市の正答率を12.8ポイント下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・対話や発表の機会を設け、話したり聞いたりする機会を意図的に増やす。 ・学級活動や普段の生活の中でも、必要な事項や重要な内容は、要点をまとめながらメモを取るなどの指導を行っていく。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を6.6ポイント下回った。 ○自分の立場とその理由を明確にして文章を書くことはできている。 ●「予想される反論と、それに対する自分の意見を書いている」の正答率は38.4%と低く、市の正答率を12.8ポイント下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を批判的に捉える力を高めることが重要になると考えられる。同じテーマについて友達と意見を交わすなどして、多様な考えがあることに気付けるようにする。 ・書き方の型を提示し、簡単な文章から少しずつ練習をして、文章を書くことへの苦手意識を減らすようにする。
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を4.9ポイント下回った。 ○「説明文全体の構成を捉えている」の問いは、市の正答率と同程度だった。 ●物語の内容を読み取る問題では、すべての問いにおいて市の正答率を下回った。 ●「説明文の叙述をもとに内容を捉えている」の問いでは、市の正答率を8.1ポイント下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書にある文の読解だけに終わるのではなく、心情や内容の理解をする際に大切となる読み取り方を、教材文から学ぶことができるようにする。 ・段落相互の関係に着目しながら、筆者の考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉え整理する活動を取り入れる。

宇都宮市立横川西小学校 第6学年【社会】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	国土の自然環境などの様子	63.2	70.3	66.4
	農業や水産業	79.3	81.6	75.3
	工業生産	83.3	87.0	77.7
	産業と情報との関わり	87.2	91.0	81.3
	日本の政治	59.5	73.2	75.3
観点別	日本の歴史	62.5	67.4	68.5
	知識・技能	66.7	73.5	72.5
	思考・判断・表現	72.1	77.3	71.5

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

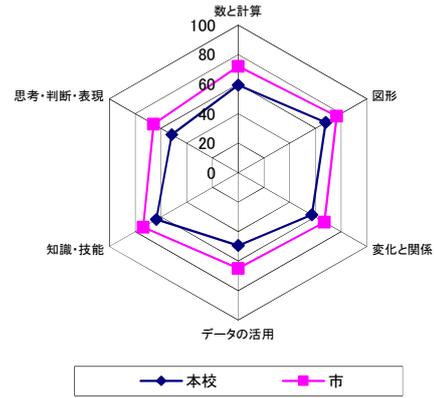
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
国土の自然環境などの様子	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を7.1ポイント下回った。 ○日本周辺の海洋名については、市の正答率を上回った。 ●国土の構成や気候の特色に関する正答率が低い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5年生の学習である国土の構成や気候の特色について、関連のある内容を扱う際は、繰り返し触れることによって知識の定着を図る。 ・日頃から地図帳を活用して調べる活動や、ICT機器を活用して地図パズルを行う活動などを取り入れる。
農業や水産業	<ul style="list-style-type: none"> ○市の正答率と同程度であった。 ○水揚げされた魚の出荷作業における工夫について、資料をもとに判断する問いは、市の正答率を上回った。 ●コメの品種改良についての理解をもとに、資料を読み取り表現する問いの正答率は62.2%で、市の正答率を下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・提示された複数の資料について、それぞれどのようなことを示しているのか、関連するものは何か、どのような問題点が明らかになるかなど、具体的に観点を示しながら読み取る活動を行っていく。
工業生産	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を3.7ポイント下回った。 ○安全性の高い自動車づくりについて、資料をもとに考える問いでは、正答率が90%を超え、市の平均と同程度であった。 ●資料をもとに表現する問題の正答率が低かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の主な輸入品・輸出品や工業の特色について再度復習をする。 ・資料を読み取り、自分の考えを記述する活動を各教科で取り入れる。
産業と情報との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を3.8ポイント下回った。 ○情報を生かした産業について選択する問いでは、市の正答率を下回るものの正答率は90%を超えている。 ●情報の発信と受信の注意点に関する問題での正答率が低かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報モラル教育とかねて、身近な事例を取り上げながら情報の扱い方を確認する。
日本の政治	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を13.7ポイント下回った。 ○日本国憲法に関する問いでは、市の正答率と同程度であった。 ●基本的な人権の尊重の基本的な考え方に関する問いの正答率は45.9%と低く、市の正答率を22.9ポイント下回った。 ●租税の役割や議会政治に関する問いでの正答率が低かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な人権の尊重の考え方について、具体的な事例を挙げながら再度復習する。 ・議会政治の仕組みや役割についてももう一度内容を確認し、図書資料やICT機器を活用しながら理解を深めさせる。
日本の歴史	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を4.9ポイント下回った。 ○縄文時代から平安時代に関する問いは、市の正答率を上回っている問題が多かった。 ●鎌倉時代以降の問いの正答率が低かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各時代ごとの主な出来事や文化の特徴について、年表を活用したり、特徴的なエピソードを基にノートにまとめたりして、理解を深めさせる。 ・歴史的な事象の名称の理解にとどまらず、前後の出来事との関連や事象から分かる事柄についても考えさせる活動を行う。

宇都宮市立横川西小学校 第6学年【算数】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	数と計算	59.3	72.1	74.6
	図形	68.0	76.5	76.1
	変化と関係	57.3	67.1	59.7
	データの活用	49.5	65.0	64.5
観点別	知識・技能	63.6	73.8	74.7
	思考・判断・表現	51.5	65.8	61.9

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

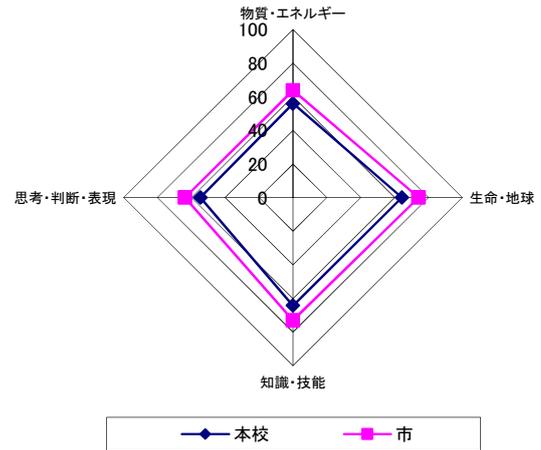
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を12.8ポイント下回った。 ●「基準量が分数の場合において、分数倍の比較量を求める式を選ぶことができる」の正答率は54.1%で、市の正答率よりも18.5ポイント下回っている。 ●「小数第一位÷小数第一位=小数第二位(商が純小数)の計算ができる」の正答率は54.1%で、市の正答率よりも16.1ポイント下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な計算の習得のために、朝の学習の計画的な活用や毎日の宿題を通して繰り返し計算に取り組ませる。AIドリルばかりでなく、ノートやプリントで練習させる。 ・習熟度別学習を上手に活用して、基礎基本の定着を図ったり、発展的な問題に取り組んだりするなど、個に応じた指導の充実を図る。 ・普段の授業の中で、問題の文脈に沿って数直線や図などに表し、数量関係を捉えられるようにしていく。
図形	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を8.5ポイント下回った。 ○「正多角形の中から点対称な図形を選ぶことができる」の正答率は79.7%で、市の正答率と同程度であった。 ●「線対称な図形の対応する点について理解している」の正答率は35.1%で、市の正答率よりも16ポイント下回っている。 ●「複雑な立体の体積を2つの直方体に分けて求めている」の正答率は55.4%で、市の正答率よりも13.6ポイント下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・線対称や点対称な図形の意味を理解して、作図に慣れることができるように、実際に図形を描いたり、組み立てたりするなど、体験的な学習を多く取り入れ、図形に対する理解を深める。 ・体積の求め方を理解している児童は80%近くいることから、問題から条件を捉えて立式することを日頃の授業でも取り入れていく。
変化と関係	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を9.8ポイント下回った。 ○「速さと時間から、道のりを求めることができる」の正答率は89.2%で、市の正答率よりも1.9ポイント上回っている。 ●「単位量あたりの大きさを求めて、どちらのセットの方が1冊あたりの値段が安いのかを説明している」の正答率は48.6%で、市の正答率よりも15.4ポイント下回っている。 ●「表から車両数と人数の割合を求め、どの路線がもっとも混んでいるか考察している」の正答率は55.4%で、市の正答率よりも14.0ポイント下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・速さや単位量あたりの大きさの学習において、問題場面から求めている数量の意味を理解できるようにするとともに、異種の2つの量を用いて立式したり言語化して説明したりする経験を積ませていく。 ・割合の問題では、文章題から基準量、比較量を読み取ることが苦手とする児童が多い。文章題を解く際には、日頃から図や数直線などに表して問題の意味を捉えることを繰り返し指導していく。
データの活用	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を15.5ポイント下回った。 ●「ドットプロットから、最頻値を読みとることができる」の正答率は54.1%で、市の正答率よりも21.9ポイント下回っている。 ●「度数分布表を完成させることができる」の正答率は66.2%で、市の正答率よりも19.5ポイント下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平均や中央値、最頻値などの言葉の意味を理解させ、活用できるように復習をする。 ・ドットプロットのデータから度数分布表を作成できるように、ドットプロットのデータの見方を復習し、問題に取り組ませる。

宇都宮市立横川西小学校 第6学年【理科】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	物質・エネルギー	55.9	63.8	61.6
	生命・地球	64.3	74.1	73.3
観点別	知識・技能	64.3	73.0	71.3
	思考・判断・表現	54.7	63.8	62.5

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

領域	本年度の状況	今後の指導の重点
物質・エネルギー	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を7.9ポイント下回った。 ●「引きつけたゼムクリップの数から、コイルの巻き数と乾電池のつなぎ方を推測できる」の正答率が44.6%で、市の正答率を10ポイント下回っている。 ○石灰水に関する設問の正答率が87.8%で、市の正答率と同程度である。 ●水溶液に溶けている物に関する設問の正答率が20.3%と、市の正答率を10.8ポイント下回っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に、学習してから時間がたっている内容に関する正答率が低いことから、学習プリントやAドリルを活用して復習を行う。 ・グループの人数を少人数にし、誰もが実験や観察などの体験的な学習をできるよう工夫する。 ・これまでの経験を生かした見通しや予想を立てて実験を行い、結果から分かることを自分の言葉で考察できるようにする。
生命・地球	<ul style="list-style-type: none"> ●市の正答率を9.8ポイント下回った。 ●流れる水のはたらきの正答率が低く、特に「浸食について理解している」の正答率が40.5%と市の正答率を20.9ポイント下回っている。 ○月の位置と見え方に関する設問の正答率が87.8%と市の正答率とほぼ同じである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Aドリルやデジタル教材の映像なども活用しながら、基礎基本の定着を図る。 ・児童の生活体験と、学習内容を結びつけながら授業を展開し児童の興味関心を高める工夫をする。

宇都宮市立横川西小学校 学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ楽しさを実感し、確かな学力と学びに向かう力を育成する授業づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・宇都宮モデルを基にした授業展開の工夫 ・1人1台端末等のICTを効果的に活用した学習活動の充実と授業づくり ・個に応じたきめ細かな指導の工夫・充実 ・学びに向かう学級集団づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・「勉強していて面白い、楽しいと思うことがある」に肯定的に回答した児童の割合は、72.9%～95.3%と学年によって差があった。 ・「自分から進んで学習に取り組んでいる」に肯定的に回答した児童の割合は、73.3%～91.0%と学年によって差が見られたが、市の割合を上回っている学年が多かった。
<ul style="list-style-type: none"> ・基礎・基本の定着を図る指導の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の学習時における漢字や計算練習の実施 ・家庭学習への意欲向上と習慣化(家庭学習強化週間・「けやきツチャレンジ」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・中・高学年では、「授業が分かる」と回答した児童は82.6%～94.2%で、市の割合を上回った学年は4学年中、2学年であった。 ・本市及び本校で設定している家庭学習の目標時間である「低学年20分以上」、「中学年40分以上」、「高学年60分以上」について、ほとんどの学年が市の割合を上回っている。

★国・県・市の結果を踏まえての次年度の方向性

・4～6年生の国・県・市の結果から、国語、社会、算数、理科において正答率が市の平均に達していない領域が多く、特に記述式の設問では無解答も多い傾向が見られる。「書くこと」に苦手意識をもっている児童が多いと考えられることから、書く活動について、国語の授業だけでなく他教科や行事などとも関連付け、時間を確保し目的意識をもって取り組むとともに、自分の考えをもち表現する機会を計画的に取り入れていく。

・学年によって差は見られるものの、学習をして分かったり、できるようになったりすることはうれしいと感じている児童の割合は高いことから、学習に対して、前向きに取り組もうとする姿勢が見られる。基礎基本の確実な定着を図り、「分かる」「できる」体験を繰り返し経験させ、学ぶ楽しさを味わわせることで自己肯定感を育んでいきたい。